慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	津田, 正太郎(Tsuda, Shotaro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.135- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

津田　正太郎

丁寧な書評をしていただいたことについて、まずは山口仁氏に感謝を申し上げる。

ここでは本書を執筆するにあたっての筆者の問題意識を改めて述べたうえで、氏のご指摘について返答を行うことにしたい。

10 年以上前に筆者が現在の職場（社会学部メディア社会学科）に着任して感じたのは、学生の興味の幅が狭いということであった。テレビドラマや CM、アニメなど、エンターテイメント系のメディア・コンテンツに関心をもって入学してくる学生が多数を占めており、社会や政治の問題とメディアとを関連づけて話そうとしても、学生の関心を引くことが難しい。「社会学部の学生なのに、社会に関心がない」ということが、当時における筆者の最大の悩みだったと言っても過言ではない（現時点で考えれば、筆者の授業スキルが低いということにも要因は求められるだろう）。

ともあれ、社会や政治に対する学生の関心の乏しさをただ嘆いているだけでは、教員として怠慢である。むしろ重要なのは、学生にとって身近な話題を出発点として、より大きな問題や構造へと視野を広げていくための努力ではないか。たとえ卑近な話題ではあっても、それを知的探索の出発点とすることで、気がつけばより大きな問題や構造へと接近しているという状態を生み出すことは可能なのではないか。そういった問題意識から、筆者は趣味としてのメディア消費をしているときであっても、学生の視野を広げるための手がかりを探ることを心がけてきた。

筆者が考えるメディア系の学部・学科のもう一つの深刻な問題は、他の多くの人文社会科学の領域とは異なり、それが「職業教育」に近いという点に起因している。高価な機材を揃えてプロの真似事をさせているだけだという指摘など、大学でどこまでメディアの「職業教育」ができているのかという点については批判もある。とはいえ、進学してくる学生が就職に対してかなり明確な意識を持っているという点で、メディア系の学部・学科はやや異質な存在ではある。それがどこまで深く考えられた希望かは措くとしても、１年生向けの授業で「メディア企業への就職を考えている人」に挙手を求めると、ほとんどの学生が手を挙げる。

こういった状況は、一面では学習意欲の高さを期待できるものの、いったんメディア企業への就職を諦めたならば何のために大学で学んでいるのかが分からなくなるという問題を引き起こす。メディア系の学部・学科に進学したとしても、「本気でマスコミを目指している他の学生の意識の高さ」に怯んだり、「有名メディア企業への就職の難しさ」や「メディア業界における

津田正太郎「著者リプライ」
三田社会学第 22 号（2017 年 7 月）135-137 頁

ブラック企業の割合の高さ」などを知ることで志望を変える学生はかなりの割合に上る。実際、筆者の勤務先でもメディア系以外の企業に就職する学生が多数を占めているのが現状である。

これらが本書を執筆するにあたっての筆者の主たる問題意識であり、以下の方針を採用した動機であった。可能な限り学生にとって身近な、もしくは興味深い事例を紹介し、それらをより大きな構図のなかに位置づけるための出発点を提供すること。柔らかい語り口を採用し、座学に対する学生の拒否反応を抑えること。そして、メディアを介して様々な現代社会の問題へと関心を広げていき、メディア企業に就職しない者に対してもメディアを学ぶことへの意味づけを与えることである。当初は大学生を主人公とした小説パートと講義パートの二部構成を考えていたというのも、それによって自然なかたちでより大きな問題や構造への視点を読者に与えられるのではないかと期待したからである。筆者の文才の無さにより挫折したが。

山口氏による「サービス精神の過剰さ」という指摘は、まさにこうした方針に起因していると言ってよいだろう。テキストを授業での解説とセットで用いるものだとするなら、たしかに事例や説明が過剰な部分があることは否定できない。しかし、枝葉を取り払い、メディアやコミュニケーションに関する議論の骨子を的確に紹介するタイプの優れたテキストであればすでに存在している。本書の目的はむしろ、テキストを通じて理解を深めてもらうことのみならず、まずはテキストを開き、ページをめくってもらうことにあったと言ってよい。ただし、「サービス精神」が空回りした結果、説明がかえって回りくどくなってしまった部分があることも否定できない。もし改訂版の出版が許されるのであれば改善に努めたい。

次に、「メタ的な解説」の多さについてだが、これは当初から意図していたというよりも、書いていくうちに結果としてそうなったという感がある。とはいえ、昨年あたりから話題となっている「フェイク・ニュース」の問題などを踏まえると、時宜にかなった内容になったのではないかと考えている。パーソナライズされた情報環境のなかでは自分にとって都合のよい情報だけに接して生きていくことが可能になり、自らの信念体系に合致する情報が「フェイク」だという指摘があっても、それを指摘する側こそが「フェイク」だという情報を優先させる態度が広がっていく。批判のための言葉が批判をされる側によって取り込まれる結果、批判が批判として機能しなくなる。

なかでも、メディアの初学者には大学で接する様々なジャーナリズム批判に圧倒され、記者クラブ悪玉論のような紋切り型の批判を内面化してしまう危険性もある。紋切り側の批判は往々にして批判を行う側の絶対的な正しさを前提とするがゆえに、自己の立場に対する懐疑を損なってしまう。それを回避するためには、メディアを消費する側の認知や立ち位置の問題に言及するメタ的な議論をより明確に行っておくことがどうしても必要になるのではないか。「メディア・リテラシー」を学んだ結果、既存メディアを「マスゴミ」として切り捨て、自らの信念体系を補強するだけの情報収集に陥るという本末転倒を回避するためにも、自己の認識枠組みの特性に対する自覚がより強く求められるようになっているというのが筆者の判断である。

（つだ　しょうたろう　法政大学社会学部）